



片手間にコーヒー



彼岸堂

.....とにかく、掃除という行為が面倒くさい。

というか、不毛であることが明白なのだ。

何故なら私は、物が捨てられない。物に愛着がわく。偏愛なのだ。

果たして今日の前にあるこの、使い古しのマグカップやら。書き散らしたノートの山を、どうして捨てることができようか。みな私と時間を共にした。言ってしまうえば彼らは私の証明者。私が生きていたことを彼らが後世に伝えうるというのに、どうして私の方からそれを裏切ることができるだろうか。

「うあー.....」

確かめるように声を出すと、想像以上に気だるさが出する。

土曜午前、えーと、8時半。

朝ごはんのトーストは最早トーストと言ったら全国のトースト愛好家に失礼と言われるぐらいに野暮ったくてこげこげのトーストだ。だって仕方ない。実家から引っ張ってきたこのトースターはうちでもかなり長生きの部類なのだ。加減をしょっちゅう間違えるおっちょこちょい。可愛い奴。

ぼりぼりという音が立つ。もさもさのパンが口の中で粘つく。何故焦げてるのにもさもさなのか。絶妙すぎる。

合わせて、泥水のようなコーヒーを血液として取りこむ。

喉に奔る黒い液体。心地よいぬるさ。その苦味。

「っ、はー.....」

当然、一杯では足りない。新しいコーヒーを入れようとしてデスクに背を向ける。

そして思い出した。なんでこんなに気だるいのか。

そう、部屋が凄まじく汚いのだ。だから掃除の話なんてメモリ始めたんだ。そしてこの有様だ。おはよう、愚図愚図の思考回路。わずかにでも現実逃避できたかい？ そう。もういい加減に現実を見ようね。ごはんも食べ終えたしね。

私の部屋は、今.....汚いのだ。

* * *

ワンルームに、少し広いキッチン。トイレとお風呂は別々。

それが私、加賀むらさきのお城の全景である。

が、今は床が見えない。とりあえず床が見えない。本があらゆるところに仏塔の如く積み重ねられ、その間には漫画やら、漫画やら、新聞やら…… 活字と絵と、写真の織り成すサーカス状態だ。

ベッドの上にはノートが散乱している。別に寝るときは布団をかけなくても寝れるので、柔らかい部分が私の体に合わせてあれば十分。何か『カタヌキ』みたいになっているのがシュールだ。

テーブルにはマグカップ。3つ。全部コーヒー用だ。砂糖だけ用。ブラック用。混ぜ用。コーヒーは好きだが、知識はない。混ぜ用がいかにカオスな状態になっているかは想像にお任せする。ちなみにさっき使ったのはブラック用である。

小物入れやら姿見の前にも本が散乱している。かろうじて化粧道具が沈没していないのは、まあ使う機会が皆無ではないからだろう。いや、ほとんど皆無に近いんだけどね。片手間に本を読むか何か書くかコーヒー飲むか、というか片手間症候群な私にとって、基本この3つに関わるものが置いていないスペースなど、存在しないのだ。それはトイレもお風呂も例外ではない。

テレビとその棚も、衣服かけも、本棚も、もうダメだ。名状しがたき何かに侵略されてしまったかのような、地獄絵図である。

そして、1日で最もいる時間が長いデスクも当然ひどい。PCとノートと、4Bの鉛筆と、本と、MDプレイヤーとMP3プレイヤーと、何かよくわからんコードがごっちゃり。あそこには私の涎とか涙とか汗とか色々口に出せない液体も恐らく一番飛び散っている。つまり危険度は相当なものだ。難攻不落、呂布だあ一つのレベル。

と、冷静に状況を確認したあたりでもう限界だった。

どう考えてもこれは人の手に余る。掃除など夢のまた夢。チャカポコチャカポコ歌いたくなるほどにフーコーだ……。

私は気だるさに身を任せ、昨夜3時から寝てない身体をベッドへと沈ませた。

満腹感とは程遠いが、それでも胃がわずかに満たされたことで、眠気が爆発寸前である。

「理性ある内に寝よう。まだ、9時だし……」

——真っ暗になる。

* * *

がらがらがらがらがんがん。

がらがらがんがんがんがんがん。

これは騒音だ。あまりにもシンプルに騒音。

がらがん！！ がらがんがんがんがん！！！！ がらがんがん！！！！

リズムカルな騒音に変わったぞ。

私も対抗してやる。ちゃかぽこちゃかぽこ。

焦燥感。じんわりと汗。騒音。ちゃかぽこ。踊る意識。気だるい身体。非接続感。ソフトウェアの読み込みに失敗。がらがんがんがん。待って、あと15分……。

「おーーきろーーっ！！」

全身に電流が走った。ような気がした。声だ。音の衝撃が鼓膜から全身へビリビリと響いたのだ。

当然私は、がばりと身体を起こすしかない。恐ろしい速度で思考がクリアになっていく。むしろ過剰なスピードなせいか眩暈がする。ぐわんぐわんと揺れる。

……女の子のにおいがする。

「やっと起きた」

聞きなれた声。

ベッドから半身だけ起こした私を見つめている。

清潔で可愛らしいブラウスとスカートに身を包み、いかにもえーと、ガーリーだっけ？ あれな感じの。悪い意味じゃない。むしろジャージ女子の私に比べたら可愛い。そんな親友、浅木菜穂。

笑顔が眩しい。

つか部屋が明るい。菜穂の白い肌が窓から差す日光をほんのりと反射しているのだ。つまり、物理的に眩しい。

「……何で菜穂がいるの」

「そろそろ一ヶ月だから」

「何の」

「私がむうの部屋を掃除してからよ。ほら、案の定汚い」

「……寝て良い？」

「ダメ。捨てるものの最後を『一応』看取ってもらわないと」

「えええっ！？ また捨てるの？」

「当然でしょ？ さ、おきて。紐で縛るから」

「えええええ、ちょっと待ってよ」

「ほら、この雑誌とか新聞紙ならすぐに捨てても大丈夫でしょ」

「えええええ」

「ノートも一箇所にまとめなよ。あ、またペットボトルそのままにしてる」

「ええええ」

「服も皺だらけになっちゃうって何回も言ってるでしょ」

「ええううう、いいじゃんか私困ってないし」

「私が困るの！」

ごすっと私の頭部に菜穂のチョップがキマる。

「あう」

「別に私も、むうを家にあげるのは問題ないの。でもたまにはこっちに遊びにきたい」

「だからさー、何か前も言ったけどさー。ここ、何も無いよ。精々DVD見るしか遊べないよ」

「ガスコンロがあるでしょ。お鍋パーティーとかはできるんじゃない？」

「いや、菜穂の家にもあるじゃん」

「……でもガスコンロはあるでしょ」

「ガスコンロどんだけプッシュするんだよ」

菜穂がぐるりと私に背を向け、唐突に新聞紙と漫画雑誌を拾い始める。

今更気づいたが部屋の蛍光灯がつけられてるしカーテンも開かれていた。どうりで物の判別がつくわけだ。

「菜穂一」

「何？」

「寝ていい？」

「手伝いなさい」

「うう」

仕方なく起き上がり、手伝うふりをしようとしてコーヒーを飲もうとしたら、とても可愛らしい笑顔をする菜穂に制止された。

私は従わざるを得なかった。

* * *

時刻は14時。

菜穂様の武力介入により、加賀家の掃除は断行され……床が見えるようになった。

「おおうおうおう」

「いつまで塞ぎ込んでいるの？」

「一杯、ものをまた捨ててしまった……」

「ゴミだけでしょ」

「私には家族なのに……」

思えば10時から4時間ぶっ通しで色々ただけで、部屋が蛍光灯無しに明るくなるというのは……もはや魔術の類なのではなかろうか。

以前よりも快適にコーヒーを入れられるようになった。そこはやはり嬉しい。

しかし疲れたことには疲れた。

すっきりしたテーブルを挟んで、菜穂と向かい合わせにクッションを敷いて座る。クッション使うのめちゃくちゃ久しぶりな気がする。

「おなかすかない？」

菜穂が向かいから覗き込むようにして尋ねてくる。

「すきました」

「何か作ってあげようか」

「お願いします」

平伏。

菜穂様は本当に良い嫁になると思います。

「さっきねえ、冷蔵庫から使えそうなものを見繕っておいたの」

「えっ、ちょっと待って。いくつかはつまみ用にとっておいたんだけど」

「？ 期限がダメそうなのは処理しちゃったけど」

「なんとおおお」

「.....むうはどうして料理できるのに冷蔵庫の使い方下手なの？」

「いやいや菜穂さん。そこはセットになるスキルじゃありませんよ。あんたが良妻スキルとして完備してるだけですから」

「褒めても捨てたものは返ってこないから」

しかし、菜穂の料理を食べるのは楽しみである。

何せ最近酒とつまみで腹を膨らませるような生活をしていたのだ。こう、手料理に対する欲求が高まっているのは否定できない。

いや、モチロン毎日そうだったわけではない。ちゃんにご飯を作ったりは適度にしていた。一昨日なんて朝に味噌汁と卵焼きと和え物とか作っちゃったりしたのだ。うん。でも毎日は無理だなあ。菜穂はよく毎日三食作れるなあ。お母さんみたいだ。

と、思ったがよくよく考えたらうちの母親は料理が作れないのだった。

* * *

「はいっ、どーぞ」

「おひょおお」

いい匂いが部屋を満たしていく。

テーブルには、つまみ用に残しておいたオイルサーディンを利用して作った和風唐辛子パスタと、簡単なコンソメスープが置かれている。

「.....作っておいてなんだけど、これ、むうも作れるわよね」

「いいの。菜穂が作ったという事実が重要。同じものでも私のより美味いはず」

「.....はいはい」

「いただきまーす」

綺麗な部屋で、温かいご飯を食べることがこんなに幸せだったか。

愛情のつまった、鰯のしょうゆ味とにんにくと唐辛子とオリーブの風味がパスタに絡んで実にうまい。ラブ。

さっき菜穂が同じものを私も作れるといった。そりゃ作れる。でも、やっぱり違う。

同じメニューの名前がついたとしても、その内に含まれている工夫の量は菜穂と私では桁違いだ。

妥協だらけのご飯しか作れない私と、今できる100%を出し切る菜穂では……ああもういいや美味しい美味しい。言葉がかったるい。

「よっぽどおなかすいてたのね」

「トーストしか食べてないから」

「こげこげの？」

「こげこげの」

「ふーん」

文字通りぺろりと食べ終わってしまい、思わず菜穂を見る。

「おかわり？」

「うん」

「りょーかい」

立ち上がる菜穂。

おっと、一つ付け加え忘れた。

「コーヒーもお願い」

「砂糖ない奴ね」

「うん」

このまま、DVDでも見ながら今日はゆっくりしよう。

